

田村遺跡 12

— 第10次・17次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告第524集

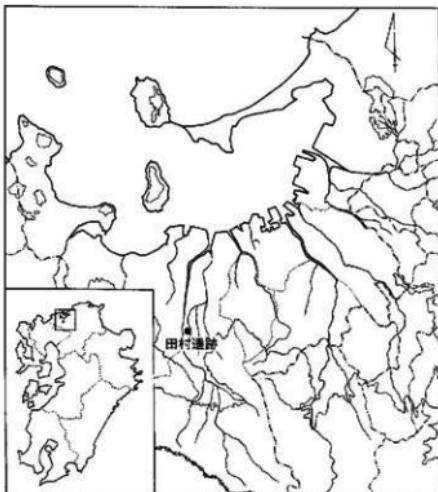
1997

福岡市教育委員会

TAMURA
田村遺跡 12

— 第10次・17次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告第524集



調査番号 8970・9358

調査略号 TMR-10-17

平成 9 年
福岡市教育委員会

序

福岡市は、まちづくりの目標のひとつに「海と歴史を抱いた文化の都市」を掲げ、実現を目指しております。いまさら申し上げるまでもなく、本市は九州の中核都市として発展しつつあり、このために既存の道路整備を中心とした、さらなる社会基盤整備の充実化を図る必要があります。

今回報告いたしますのは、本市西部に位置し、縄文時代から中世の複合遺跡である田村遺跡を平成元・4年に実施しました発掘調査記録です。本調査は主要地方道大野城・二丈線の整備工事に先だって実施したものです。

今後、本書および調査資料が学術研究だけに留まらず、市民各位の文化財に対する認識を深めるために寄与することを深く願うものです。

最後になりましたが、発掘調査にあたり御指導と御援助をいただいた関係各位にたいし、深く感謝いたします。

平成9年3月1日

福岡市教育委員会
教育長 町 田 英 俊

凡　例

- 本書は、福岡市教育委員会が福岡市早良区大字川における道路拡幅工事に先立って実施した田村遺跡群第10次・17次の発掘調査報告書である。
- 本書における各調査の細目は下記のとおりである。
- 遺構図には、遺構ごとに一連の遺構番号を付け、番号の前に、S C(竖穴住居)、S D(溝・濠)、S K(土坑)、S X(その他)などの分類記号を付した。
- 本書に掲載した図面は第10次調査を瀧本正志、第17次調査を常松幹雄・是田敏・浜石正子・撫養久美子がそれぞれ作成した。がそれぞれ作成した。
- 本書に掲載した写真は、第10次調査を瀧本正志、第17次調査を常松幹雄が撮影した。
- 本書の執筆は下記のとおりである。
I - 1-2, II - 1-2, III - 1瀧本正志
II - 2, III - 2常松幹雄
- 本書の編集は瀧本正志が担当した。
- 本書に係わる発掘調査の遺物・記録類の全ては、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵されている。

調査次数	調査番号	遺跡略号	調　　査　　地	調査面積	調　　査　　期　　間
第10次	8970	TMR-10	早良区田村3丁目40地	600m ²	1990.2.8～3.31
第17次	9358	TMR-17	早良区田村4丁目673-7地	372m ²	1990.1.15～2.5

本文目次

Iはじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査組織	2
II遺跡の立地と概要	3
1. 遺跡の立地と歴史的環境	3
2. 遺跡の概要	4
III調査の記録	6
1. 第10次調査	6
(1) 調査概要	6
(2) 遺構と遺物	7
(3) 小結	11
2. 第17次調査	12
(1) 調査概要	12
(2) 遺構と遺物	12
(3) 小結	21

1. 田村遺跡第10次調査

掲 図 目 次

Fig. 1 調査地位置図 (1/200,000)	1
Fig. 2 周辺遺跡分布図 (1/75,000)	3
Fig. 3 田村遺跡調査区位置図 (1/8,000)	5
Fig. 4 第10次調査区位置図 (1/1,000)	6
Fig. 5 第10次調査 I 区遺構配置図 (1/200)	7
Fig. 6 第10次調査 I 区出土遺物実測図 (1/3)	7
Fig. 7 第10次調査 II 区遺構配置図 (1/200)	8
Fig. 8 第10次調査 II 区出土遺物実測図 (1/3)	9
Fig. 9 第10次調査 III 区遺構配置図 (1/200)	10
Fig. 10 第10次調査 III 区出土遺物実測図 (1/3)	10

図 版 目 次

図版 1 (1)第10次調査 I 区調査区全景(東から)	
(2)第10次調査 II 区調査区第1面中央部(東から)	
(3)第10次調査 II 区調査区SD08-09(南から)	
図版 2 (1)第10次調査 II 区調査区第2面全景(東から)	
(2)第10次調査 II 区調査区SD13(南から)	
(3)第10次調査 III 区調査区全景(東から)	
図版 3 (1)第10次調査出土遺物	

表 目 次

第1表 田村遺跡調査一覧

2. 田村遺跡第17次調査

掲 図 目 次

Fig. 1 第17次調査区の位置 (1/300)	13
Fig. 2 第17次調査区遺構配置図 (1/120)	14
Fig. 3 SC-01・SC-02・SC-03遺構実測図 (1/60)	15
Fig. 4 SD-01・SK-01・SK-02遺構実測図 (1/40)	16
Fig. 5 SK-01・SK-02・SC-03出土遺物実測図 (1/3・1/4)	18
Fig. 6 SD-01出土遺物実測図 (1/3・1/4)	19
Fig. 7 ST-01・ST-02遺物実測図 (1/4)	20

図 版 目 次

図版 1 (1)第17次調査 I 区全景(西から)	
(2)第17次調査 I 区全景(東から)	
図版 2 (1)SC-01発掘作業風景(西から)	
(2)SC-01全景(南から)	
図版 3 (1)SC-02全景(南から)	
(2)SC-03全景(北から)	
図版 4 (1)SK-02全景(西から)	
(2)ST-01全景(南から)	
(3)ST-02全景(西から)	
図版 5 (1)第17次調査 I 区全景(西から)	
(2)SD-01作業風景 1(北から)	
(3)SD-01作業風景 2(北から)	
図版 6 (1)SD-01完掘(東から)	
(2)SD-01完掘状況(南から)	
(3)SD-01全景(東から)	

I はじめに

1. 発掘調査に至る経過

福岡市教育委員会（埋蔵文化財課）では、毎年8月に市役所各部局や管内に所在する公立機関および私立の高校・大学に対し、各機関の翌年度における土木工事を伴う事業照会（事前審査）を行なっている。この事業照会は、埋蔵文化財包蔵地域内における埋蔵文化財の保護はもちろん、地域外における埋蔵文化財存在の把握、調査計画の立案、遅延ない発掘調査を行なうための資料とすることを目的としているものである。このチェック体制により、文化財保護（記録保存）と開発事業の円滑化との共生を図るとともに、埋蔵文化財の周知化が図られているものと考えている。

第10次調査については、1986年（昭和61年）11月14日付文書（土木第2986号）で、福岡市土木局道路部道路計画課から埋蔵文化財課へ、田村遺跡の中央部を東西に走る主要地方道大野城・二丈線の拡幅を伴う整備事業計画の回答があった。このため、埋蔵文化財課では、計画予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地域（田村遺跡）に含まれるとともに、計画予定地の東部に位置する田村遺跡第5次調査等で発見した中世の遺構の広がりが想定されること、さらには計画予定地に近接する第7次調査で土地区割に関係する溝が検出されていることなどから、1987年（昭和62年）1月28日付文書（教埋第58号）で、遺跡が所在する旨の回答を行なった。

また、第17次調査についても、1992年（平成4年）9月9日付文書（土木第16475号）で、土木局道路建設部道路建設第2課から事業回答があり、事業予定地周辺における発掘調査成果をもとに、1992年（平成4年）9月22日付文書（教埋第509号）で、遺跡が所在する旨の回答を行なった。

両次調査とも、事業前に協議を行い、発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、第10次調査を1990年2月8日～同年3月31日、第17次調査を1994年1月15日～同年2月5日に行なった。出土遺物の整理作業や報告書の刊行は、両次調査とも1996・97年に行った。

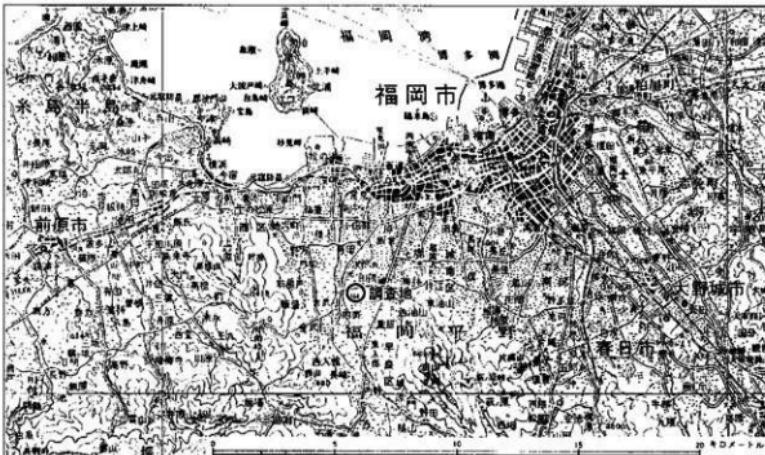


Fig. 1 調査地位置図 (1/200,000)

2. 発掘調査の組織

(1) 第10次調査

調査委託	福岡市土木局道路部道路計画課		
調査主体	福岡市教育委員会文化財部(調査時:文化部)埋蔵文化財課		
教育長	町田英俊	佐藤善郎	(調査時)
文化財部長	後藤直	川崎賢治	(タ)
埋蔵文化財課長	荒巻輝勝	柳田純孝	(タ)
同課第1係長	横山邦繼	飛高憲雄	(タ)
調査担当	文化財主事	灑本正志	
事務担当		内野保基	松延好文(タ)
調査補助		高橋建治	
資料整理	青柳恵子 岩瀬宏子 牛尾美保子 内山孝子 尾崎京子 甲斐田嘉子 斎藤美紀枝 中村智子 口名子節子 真名子順子 宮坂環 车田山佳 山口とし子 渡辺ちず子		
調査協力	有田吉太 井口菊太郎 伊藤みどり 牛尾秋子 牛尾奈美枝 牛尾二三子 牛尾聰 尾崎達也 尾崎八重 大内文恵 金子ヨシ子 菊地栄子 倉光ナツ子 柳光雄 正峰由須子 白坂フサヨ 懇懃とみ子 岳美保子 典略初 鍋山千鶴子 西鷗サキ 西鷗マツ子 林嘉子 平田タマエ 平田勇夫 平田千鶴子 細川ミサヲ 真名子ユキエ 山西人美 結城シズ 結城千賀子 結城信子 結城弥澄 鹿坂武実 鹿坂ミサヲ		

(2) 第17次調査

調査委託	福岡市土木局道路建設部道路建設第2課		
調査主体	福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課		
教育長	町田英俊	尾花剛	(調査時)
文化財部長	後藤直	川崎賢治	(タ)
埋蔵文化財課長	荒巻輝勝	折尾学	(タ)
同課第1係長	横山邦繼	横山邦繼	(タ)
調査担当	文化財主事	常松幹雄(現福岡市博物館学芸員)	
事務担当		内野保基	入江辛男(タ)
資料整理	池田由美 衛藤美奈子 是田教		
調査協力	麻生寿昭 菅池栄子 黒木正治 烏井原良浩 桥木修一 原美晴 平野義雄 船越恒人 堀本歳四郎 峰不二夫 吉川順岳 鹿坂レイコ		

II 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の立地と歴史的環境

福岡市の北半部、博多湾を囲むように位置する平坦地を一般的に福岡平野と呼んでいるが、地形的には、いくつかの平野から構成される。この、福岡平野の西部を占める早良平野は、西を脊振山・長垂山、東を油山から派生した丘陵によって囲まれた沖積平野である。平野の形成は、主に水系を脊振山系に発し、平野中央を北流して博多湾に達する室見川および、その水系に属する大小の河川による。これらの河川の流路は国内河川の有する特質と同様に急勾配、短距離を呈している。このため、丘陵裾部から河川近辺までの土質は砂礫層で、早良平野そのものが扇状地を呈していると言えよう。

田村遺跡群は、早良平野の中央部、早良区田村に所在し、範囲は東西700m・南北800mを測る。標高は14~17mを呈し、周辺には低位水田が広がる。

田村遺跡群周辺においては原始より連続的に人々の生活の跡を見ることができる。

縄文時代の遺跡としては、田村遺跡群の南に位置する四箇遺跡、岩本遺跡がある。早期~晩期に至る各期の遺構・遺物が確認されており、周辺地形および当時の生活環境を知ることができる。

弥生時代の前半期の遺跡としては田村遺跡群の南に位置する東入部遺跡群、西に位置する吉武高木遺跡がある。東入部遺跡、吉武高木遺跡とも弥生時代前期~中期にかけての豪族墓を中心とする埋葬遺跡で、一部の墓には剣装飾品などが副葬されている。中期~後期にかけては、早良平野の海浜部近くでも数多く発見されており、著名な遺跡だけでも藤崎遺跡群、姪浜遺跡群、拾六町ツイジ遺跡、野方遺跡、野方久保遺跡、有田遺跡群、原遺跡群などが確認されている。これらの遺跡の大半は埋葬遺跡であるが、各時期における遺跡の出現状況は、土木技術等の開発に裏打ちされた平野低地への進出を明示している。古墳時代では室見川両岸において、樋渡古墳、押塚古墳、梅林古墳などの一連の酋長墓が造営される。後期の油山、飯盛山、叶岳等の平野を囲む各山麓には円墳等が築造され、群集墳などが形成される。古代から中世の遺跡としては、下山門敷町遺跡、有田遺跡群、原遺跡群、清末遺跡群がある。田村遺跡群の南に位置する清末遺跡群では在地の豪族の館跡と推定される、建物跡、堀が発見されている。

また、調査地周辺には、Fig.3でも明瞭に見られるように、整然とした方形的地割、すなわち条理地形が良好な状態で残っている。



Fig. 2 周辺遺跡分布図 (1/75,000)

2. 遺跡の概要

田村遺跡群の調査については、第1表に示すように、これまでに17次の調査が実施されている。調査では縄文時代早期～近世にいたる多くの遺構遺物が発見されている。これらの遺構遺物が示す遺跡の発展期は縄文時代後期・晚期、弥生時代・平安時代～室町時代初頭の三つの時期にピークをもつとされている。特に、本遺跡群においては掘立柱建物群を中心とした中世の集落跡が発見されており、中世の社会構造を知る上で貴重な資料を提供している。

(各調査における概要)

- 第1次調査** 四世紀後半の土坑、10世紀の土坑などが発見されている。
- 第2次調査** 縄文時代の埋葬、弥生時代の河川および井堰、古代・中世の樋、掘立柱建物群、縦穴住居跡、土塊墓群が発見されている。中世の遺構は11世紀後半～14世紀初頭、特に12、13世紀を中心とする集落である。
- 第3次調査** 弥生時代前期～中期の縦穴住居跡、土坑、河川とそれに伴う杭列、古墳時代の水田、中世の掘立柱建物群、井戸、土坑等が発見されている。中世の遺構は11世紀代を主体とする集落である。
- 第4次調査** 縄文時代は、後・晚期の石器、土器。古代～中世には、掘立柱建物群、竪穴、井戸などが多く発見されている。中世の遺構は11世紀代を主体とする集落である。
- 第5次調査** 縄文時代晚期の溝、土坑、弥生時代前期の斐棺墓18基、11世紀～14世紀にかけての掘立柱建物100棟以上、井戸11基、土坑、溝などが発見された。特に、掘立柱建物群をはじめとする遺構のあり方は、中世における集落の変遷を知る上で貴重な資料を提供した。
- 第6次調査** 縄文時代後・晚期の小欠を発見した。
- 第7次調査** 古墳時代（5世紀前半）の縦穴住居跡、中世（12世紀後半～13世紀）の溝、土坑が発見されている。
- 第8次調査** 第5次調査で発見した中世の南北溝が北に直線的に続いていることが確認された。溝は規模を縮小させながらも現在まで存続している。
- 第9次調査** 縄文時代晚期の土器、石器、中世の溝、土坑、柱穴等が発見されている。これまでに発見された中世集落の西辺を示すものである。
- 第10次調査** 中世の溝および柱穴を発見した。
- 第11次調査** 第5・8次調査で発見した中世の南北溝が北に直線的に続いていることが確認された。
- 第12次調査** 中世の地割に関連する溝や、土坑、井戸などが発見された。
- 第13次調査** 平安時代の土坑、中世の溝などが発見された。
- 第14次調査** 平安時代の掘立柱建物などが発見された。
- 第15次調査** 平安時代の掘立柱建物などが発見された。
- 第16次調査** 旧河川などが発見された。
- 第17次調査** 弥生時代中期前半～後半の縦穴住居跡、溝などが発見された。
- 第18次調査** 古代から中世と考えられる柱穴を確認した。



Fig. 3 田村遺跡調査区位置図 (1/8,000)

調査次数	調査番号	調査原因	調査面積	調査期間	調査報告書
1	7 8 0 3	学校建設	3,000m ²	1978.10.11~1978.12.2	福岡市埋蔵文化財調査報告書第70集 1981
2	8 0 3 4	団地建設	2,650m ²	1980.12.5~1981.4.14	福岡市埋蔵文化財調査報告書第89集 1982
	8 0 3 5			~	福岡市埋蔵文化財調査報告書第104集 1984
3	8 1 4 4				
	8 1 4 5	団地建設	12,820m ²	1981.4.22~1982.5.15	福岡市埋蔵文化財調査報告書第167集 1987
	8 1 4 6			~	
4	8 2 3 3	団地建設	8,500m ²	1983.1.20~1983.6.15	福岡市埋蔵文化財調査報告書第216集 1990
5	8 4 0 4	学校建設	17,000m ²	1984.7.1~1985.7.6	福岡市埋蔵文化財調査報告書第192集 1988
6	8 4 2 9	店舗建設	800m ²	1984.8.1~1984.9.10	整理中
7	8 4 4 7	道路建設	1,800m ²	1984.12.1~1984.12.29	福岡市埋蔵文化財調査報告書第168集 1987
8	8 8 4 7	道路建設	632m ²	1988.12.2~1989.3.11	福岡市埋蔵文化財調査報告書第384集 1994
9	8 9 3 4	公民館建設	540m ²	1989.7.5~1989.8.16	福岡市埋蔵文化財調査報告書第302集 1992
10	8 9 7 0	道路建設	600m ²	1990.2.8~1990.3.31	本報告
11	9 0 5 9	道路建設	656m ²	1991.1.16~1991.3.9	福岡市埋蔵文化財調査報告書第384集 1994
12	9 2 4 2	道路建設	512m ²	1992.10.26~1992.12.14	福岡市埋蔵文化財調査報告書第385集 1994
13	9 2 4 7	道路建設	581m ²	1992.12.1~1993.1.30	福岡市埋蔵文化財調査報告書第384集 1994
14	9 2 4 8	団地建設	1,500m ²	1992.11.30~1993.1.31	福岡市埋蔵文化財調査報告書第423集 1995
15	9 3 2 0	河川施設	740m ²	1993.6.17~1993.7.31	福岡市埋蔵文化財調査報告書第423集 1995
16	9 3 2 1	施設建設	80m ²	1993.6.28~1993.6.29	福岡市埋蔵文化財年報 Vol.8 1995
17	9 3 5 8	道路建設	372m ²	1994.1.15~1994.2.5	本報告
18	9 6 2 4	住宅建設	500m ²	1996.8.2~1996.8.7	整理中

第1表 田村遺跡都発掘調査一覧

III 調査の記録

1. 第10次調査

(1) 調査概要

第10次調査地は、Fig. 3に示すように田村遺跡の西辺中央に位置し、標高14.7mを測る水出である。これまで、遺跡の西辺部においては第7・9次調査が実施されている。

発掘調査は、1990年(平成2年)2月8日に着手し、同年3月15日に終了した。調査に際しては、次の二点を調査の主題として設定した。一点目は、第5次調査で検出した中世集落の範囲を明らかにすること。二点目は、第5・7両次調査において確認された中世の土地区割と密接な関係が考えられる南北溝と現在に残る土地区画との関係、および溝が内包する地形の変遷を明らかにすることであった。

田村遺跡群には、Fig. 3でも明瞭に見られるように整然とした方形の地割、すなわち条理地形が良好な状態で残っている。その規模は方一町を示し、地境の各辺には小規模な南北水路がある。しかしながら、耕地の用水の流れは、水路を使用するものではなく、上位の水出を経由するものである。これまでの調査から、中世の段階においては水路が整然と存在していたことを窺わせる。

調査に先立ち、調査地が既存の道路を挟む位置関係にあることから、Fig. 4に示すように調査地にI~III区の3区画を設定した。その後、バックフォ…により表土の耕作土、床土の除去を開始した。その結果、地表下0.3~0.5mの遺構検出面(黄褐色土)において、土坑、溝、柱穴小穴を検出した。遺物はコンテナ8箱の土師器、瓦器、陶磁器、石鍋等が出た。内容的には日常雑器が多数を占めるものの、調査面積に対しては中国産磁器が多量に出土している。

調査は1990年(平成2年)3月15日に終了したが、その後に担当者の人事異動などがあり、遺物整理、調査報告書の作成は1995・96年度に行なった。

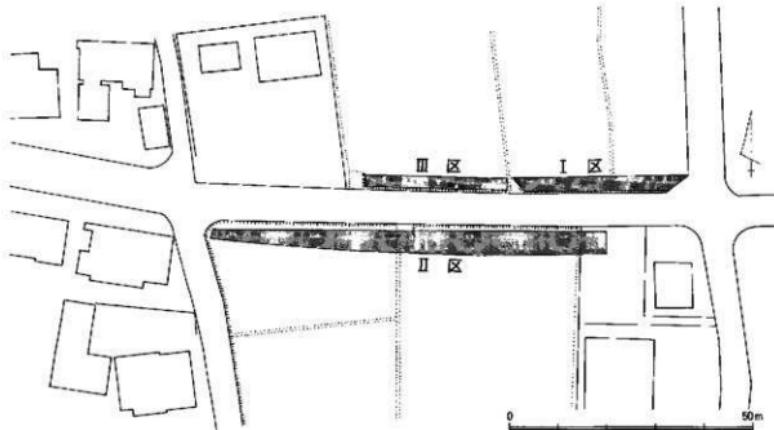


Fig. 4 第10次調査位置図 (1/1,000)

(2) 遺構と遺物

a. I 区調査区

層序は上から、耕作土(15cm)、床上(10cm)、黄褐色土(5cm)で、茶褐色砂質土である。

遺構は土坑4基、小穴多數を主に調査区の東半部で検出した。

[遺構]

SK01は調査区の東半部北辺で検出した土坑である。径1.5mを測る円形の平面形を呈し、深さ16cm。土坑内からは、上師器壺・皿、越州窯系青磁壺、同安窯系青磁碗などが出土している。

SK02は調査区の東半部北辺、SK01の西に位置する土坑である。遺構の一部は調査区の外に拡がり、全形は知りえないが、SK01と同規模と考えられる。深さ15cm。土坑内からは、上師器壺・皿、青磁小皿、白磁碗、瓦器碗などが出土している。

SK03は調査区の中央部北辺、SK02の西に位置する土坑である。遺構の一部は調査区の外に拡がり、全形は知りえないが、検出状況から短径60cm、長径80cm前後の大きさを予測すると推定される。土坑内からは、土師器壺・皿、青磁碗などが出土している。

SK04は調査区東辺部で検出した土坑で、東西80cm、南北60cmを測る梢円形の平面形を呈し、深さ15cm。土坑内からは、土師器壺・皿・碗などが出土している。

[遺物]

I区調査区からは土師器皿・壺・碗、陶器鉢、瓦器鉢・碗、青磁碗・壺、白磁皿・碗などが包含層である黄褐色土や茶灰色粘質土から出土している。

70は土師器の壺で、口径13.5cm、底径9.5cm、器高3.1cmを測る。口縁は直線的に外反しながら立ち上がり、端部は丸く仕上る。胎土に粗砂は含まれないが、全般的に粗く、暗茶褐色を呈している。底部には糸切り痕、板目痕が残る。

85は白磁の小皿で、口縁部を欠く。底部は底上げ気味に削り、露胎。底部径は4.5cm。胎土は灰白色。釉は薄いオリーブ色を帯びた灰白色を呈している。

73は白磁の碗で、口縁部の破片で底部を欠く。口径14.5cmが復原される。胎土は薄い黄灰色。釉は薄いオリーブ色を帯びた灰白色を呈している。外面の上半部まで施釉している。口縁は外反しながら立ち上がり、断面形が三角形の折返しの玉縁をもち、折返しの端部を明瞭に残す。

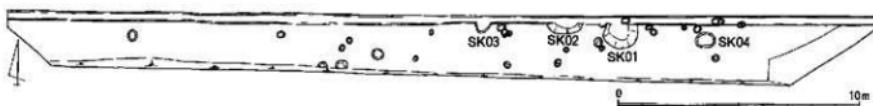


Fig. 5 第10次調査 I 区遺構配置図 (1/200)

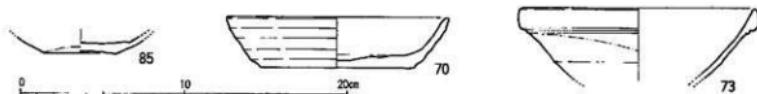


Fig. 6 第10次調査 I 区出土遺物実測図 (1/3)

b. II区調査区

層序は上から、耕作土(15cm)、床土(10cm)、灰色土(10cm)、暗黃褐色土(5cm)、茶灰色土(5cm)、黃褐色土(5cm)、茶褐色砂質土である。調査区の西部では黃褐色土、茶褐色砂質土が消え、パラス層になる。遺構は茶灰色土上面とその下層に位置する黃褐色土上面で検出した。Fig. 7では、茶灰色土面(第1面)で検出した遺構を黒色、下層(第2面)で検出した遺構を朱色で表示した。

〔遺構〕

第1面では溝、土坑、小穴を主に調査区の中央部東半部で検出した。溝は全て南北溝。

S D 06は調査区の中央部で検出した溝で、遺構は南調査区外に続く。幅50~80cm、深さ20cm、検出長は2.5mを測る。溝の北端壁は緩やかに立ち上がり調査区の中央で消滅する。

S D 07は調査区の中央部、S D 07の西方6mに位置する溝で、遺構の一部は調査区外に拡がり、全形を知りえない。幅0.6m、深さ15cm、検出長は2.5mを測る。溝の北端壁は緩やかに立ち上がり調査区の中央で消滅する。

S D 08は調査区の中央部で検出した南北溝で、遺構は調査区の外にも続く。幅1.5m、深さ10cm、検出長は4mを測る。溝の直上に位置する現況の畦と方向、位置を同じくする。

S D 09は調査区の中央部、S D 08の西方1mに位置する南北溝で、遺構は調査区の外にも続く。幅1m、深さ10cm、検出長は4mを測る。

S D 10は調査区の中央部、S D 09の西方9mに位置する南北溝で、遺構は調査区の外にも直線的に続く。幅70cm、深さ15cm、検出長は4mを測る。

S K 11は調査区の中央部で検出した土坑である。径80cmを測る円形の平面形を呈し、深さ10cm。壁面は焼けて、赤褐色を呈している。

S K 12は調査区の中央部、S K 11の北に位置する土坑である。深さ20cm。遺構の一部は調査区の外に拡がり、全形を知りえないが、検出状況から短径90cm、長径1m前後の大きさを呈すると推定される。

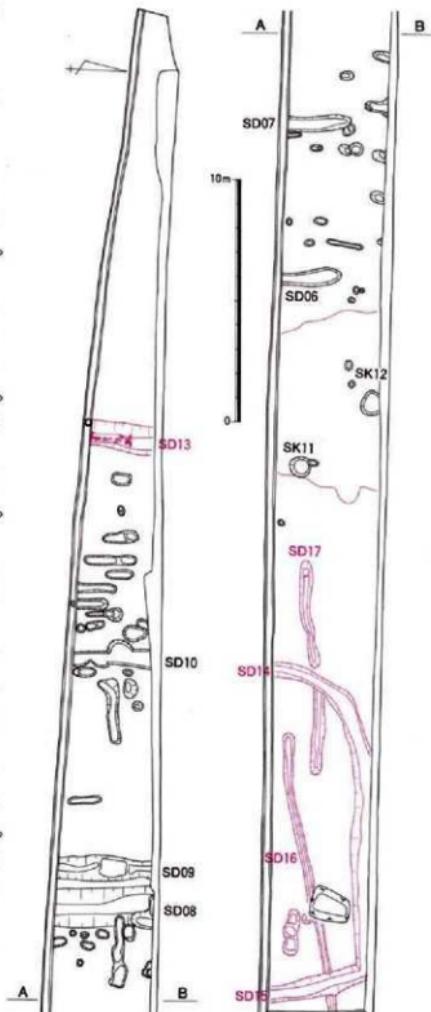


Fig. 7 第10次調査II区遺構配置図 (1/200)

第2面では溝を調査区の東半部で検出した。

S D13は調査区の西半部で検出した南北溝で、溝は調査区外へ続く。幅1m、深さ10~15cm、検出長は3mを測る。溝底には數十個の拳大の川原石が認められた。上層のS D09とは18mの距離がある。

S D14は調査区の東辺部で検出した溝である。調査区の南半部では南北溝であるが中央で東に折れ曲がりS D15と合流して調査区外へ続く。幅60~100cm、深さ10cm、検出長は14mを測る。

S D15は調査区の東辺部で検出した南北溝で、溝の南は調査区外に続き、北は調査区北辺部でS D14と合流する。幅80~100cm、深さ10cm、検出長は4mを測る。

S D16は調査区の東半部で検出した東西溝で、溝は東調査区外に続く。幅30cm、深さ8cm、検出長は11mを測る。溝の西端壁は緩やかに立ち上がり調査区の中央で消滅する。

S D17は調査区の東半部、S D16の北に位置する東西溝で、幅30~50cm、深さ5cm、検出長は9mを測る。溝の西東端壁は緩やかに立ち上がり調査区の中央で消滅する。

〔遺物〕

II区の出土遺物は、土師器小皿・坏・椀、青磁皿・碗、白磁碗、瓦器椀、滑石製石鍋等が、遺構検出面の黄褐色土層や茶灰色粘質土層から出土している。

84は青磁皿で口縁部を欠く。底部は露胎。釉は暗緑色を呈し、厚く施されている。見込には花文が彫られている。

86は白磁の小皿で、口径9.5cm、底部径4cm、器高2.4cmを測る。口縁は外反しながら立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げている。胎上は乳灰色。釉は薄い青色を帯びた灰白色を呈し、厚く施されている。

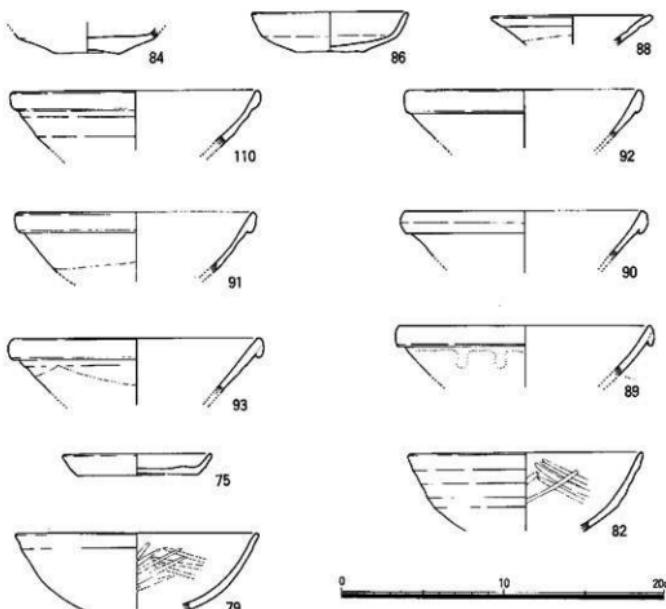


Fig. 8 第10次調査Ⅱ区出土遺物実測図 (1/3)

底部は露胎。見込には花文が彫られている。

88は小ぶりの白磁碗と考えられる。口縁部の破片で底部を欠くが、口径10cmが復原される。

89～93・110は白磁の碗である。いずれも口縁部の破片で底部を欠く。口径14～15cmが復原される。胎土は乳灰～灰白色。釉は薄いオリーブ色～灰白色を呈している。外面の上部まで施釉しているものが多い。口縁は外反しながら立ち上がり、折返しの玉縁をもつ。89～93は玉縁が厚く、折返しの端部を明瞭に残すのに対し、110は玉縁が厚く、折返し端部の調整を行なっている。

75は土師器の小皿で、口径9cm、底径7.5cm、器高1.3cmを測る。口縁は直線的に外反しながら立ち上がり、端部は丸く仕上る。胎土は精選されている。底部には糸切り痕と板目痕が残る。

79は内面黒色の椀で、底部を欠くが、口径15cmが復原される。口縁はやや内弯しながら立ち上がり、端部は丸く仕上る。内面にはヘラ磨きが施されているが、やや荒い。

82は瓦器の碗で、底部を欠くが、口径14.5cmが復原される。口縁はやや内弯しながら立ち上がり、端部は丸く仕上る。内外面にはヘラ磨きが施されているが、暗文は認められない。

C. III区調査区

層序は上から、耕作土(15cm)、床土(10cm)、黄褐色土(5cm)、茶褐色砂質土で、遺構検出は茶褐色砂質土上向で行なった。

(遺構)

遺構は数基の小穴を主に調査区の東半部で検出したにとどまる。

(遺物)

III区の出土遺物は、土師器小皿・壺・椀・青磁皿・碗、白磁碗、瓦器碗・壺、鐵滓などが出土している。

109は土師器の小皿で、口径4.8cm、底径7.5cm、器高1cmを測る。口縁は直線的に外反しながら立ち上がり、端部は丸く仕上る。胎土に粗砂は含まれないが、全般的に粗い。底部には糸切り痕が残る。

101は高台付の白磁皿。底部、高台部を欠くが、口径11cmが復原される。口縁端部は尖る。

99は龍泉窯系の碗で、底部を欠く。口径16cmが復原される。内面には片切彫の花文。胎土は灰白色。釉は薄い青灰色を呈している。

100は白磁の碗で、底部を欠く。口径15cmが復原される。口縁端部は外へ折れ曲がる。胎土は灰色。釉は灰色を呈している。内面には線彫りが施されている。



Fig. 9 第10次調査III区遺構配置図 (1/200)

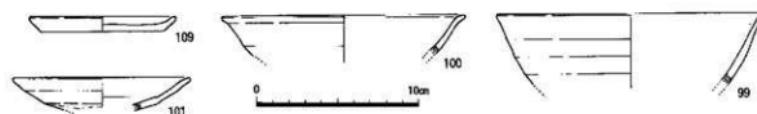


Fig. 10 第10次調査III区出土遺物実測図 (1/3)

(3) 小 結

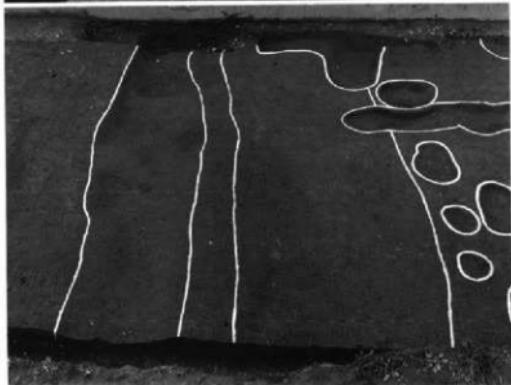
中世集落について

今回の調査では、調査区の幅が限定されていたために、柱穴と考えられる遺構あるものの建物跡などは認められなかった。今次調査の東150mに位置する出村小学校の位置する一帯には、大規模な中世集落が第5次調査で発見されている。しかしながら、今次調査の南50mに位置する第9次調査や第5次調査地の西隣に位置する第18次調査においても、今次調査と同様に集落の拡がりと結びつく遺構は認められていないことから、中世集落の範囲は出村小学校の位置する一町四方内と考えるのが妥当であろう。

地割溝について

今調査地の周辺においても地割に関連する溝が第7次調査では南北溝、第12次調査では東西溝がそれぞれ検出されている。これらの溝は一町に画された地境に位置する。本次調査はそれぞれの溝の延長線上に位置するが、調査区内では認められないことや、調査区間にある道路が第12次調査地の西からやや北に偏して作られていることから、東西溝は道路上にあるものと考えられる。

Ⅱ区調査区において数条の南北溝を検出した。その中でSD08は、数度の掘返しが認められ、直上の現況は疋となっている。さらにⅢ調査区では認められないことから、SD08は方一町内の細部地割に関連する溝と考えられる。このことから、今後の調査においても地内の溝の在り方に留意する必要があろう。





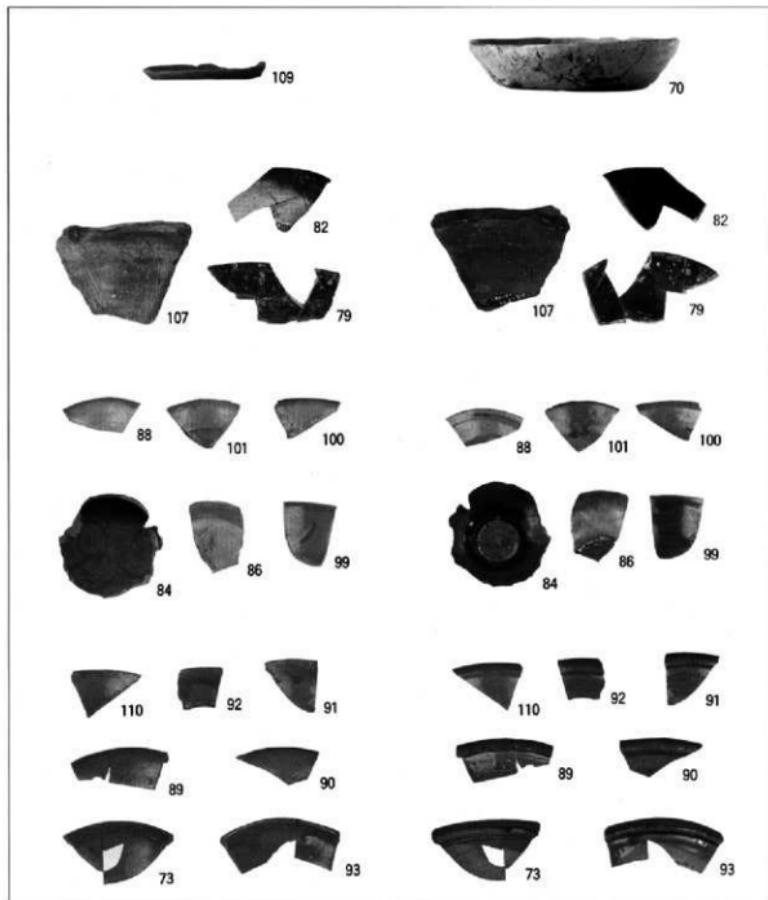
(1) 第10次調査 II区調査区
第2面全景 (東から)



(2) 第10次調査 I区調査区
SD13 (南から)



(3) 第10次調査 III区調査区
全景 (東から)



(1)第10次調査出土遺物

田村遺跡

—第17次調査報告—

2. 第17次調査

(1) 調査概要

調査区は、室見川の東岸の沖積平野、田村遺跡群の北東の端に位置する。標高は、14m前後である。福岡市土木局道路建設第2課では交通安全施設の整備事業として、自転車と歩道部分の拡幅を計画した。拡幅予定地の現況は主に田で一部に既設の建造物があった。

県道大野城二丈線に沿って自転車道の建設が予定されている今回の調査区から西側の約250mの区間については5か所にわたって東西方向の試掘を行なったが、旧河川の氾濫源にあたり、遺構は確認できなかった。したがって調査区は幅5mで全長75mにわたる375.5m²である。

調査は1994年1月15日に開始し、2月5日に終了した。

(2) 遺構と遺物

検出遺構 調査区の現況は、田であり、幅5mの全長75mにわたって面的な調査をおこなった。ここでは東からI・II・III調査区として説明する。III調査区の西端から5~9mで旧河川の落ちを確認した。

調査区は、拡幅という性格上狭長で、現況の舗装道路をはさんで東西に分かれている。遺構は、竪穴住居跡3基、溝1条、土壙2基、このほか遺構プランは不明だが、土器のまとまりが2か所認められた。これは、土壙の上部が削平されて底に堆積した遺物が露出したものかも知れない。このほか多数の柱穴が検出された。遺構の時期は弥生中期の初頭から後葉にかけてであり、中期前葉を主体とする集落跡である。

【遺構】

住居跡

SC-01 円形プランの住居跡、北半分は道路部分にあるため調査できなかった。径は現況で5.6mをはかる。東側に一段、テラス状の高まりがあるが切合は不明である。主柱穴は不明である。埋土から時期を決めうる遺物は検出されなかつた。図化できたのは、石斧1点のみである。

SC-02 隅丸方形プランの住居跡、長軸4.4m、短軸2.85mをはかる。主柱穴ではなく、中央部と南東部に炭化物の堆積が確認された。時期を限定できる資料は検出されなかつたが、中期前半の土壙(SK-02)に切られることから中期初頭と推定される。

SC-03 不整形プランの住居跡である。南西部を河川の氾濫によって切られる。主柱穴は不明である。時期を決めうる遺物は発一点のみである。

SD-01 東側に張り出し気味に弧をえがく。断面は逆台形を呈する。完堀状況で溝の底の高低差はほとんどない。埋土の堆積は、下層が暗灰色で上層が黒色を帯びた灰色土である。遺物は上下両方から検出された。現況の幅は上面で1.2m、深さは30~35cmをはかる。

SK-01 不整形土壙というよりは、ゆるい落ちである。長軸1.8mをはかる。

SK-02 先述したSC-02を切る土壙である。不整形であるが、南北にのびるプランである。中期前葉の土器がまとまって出土した。

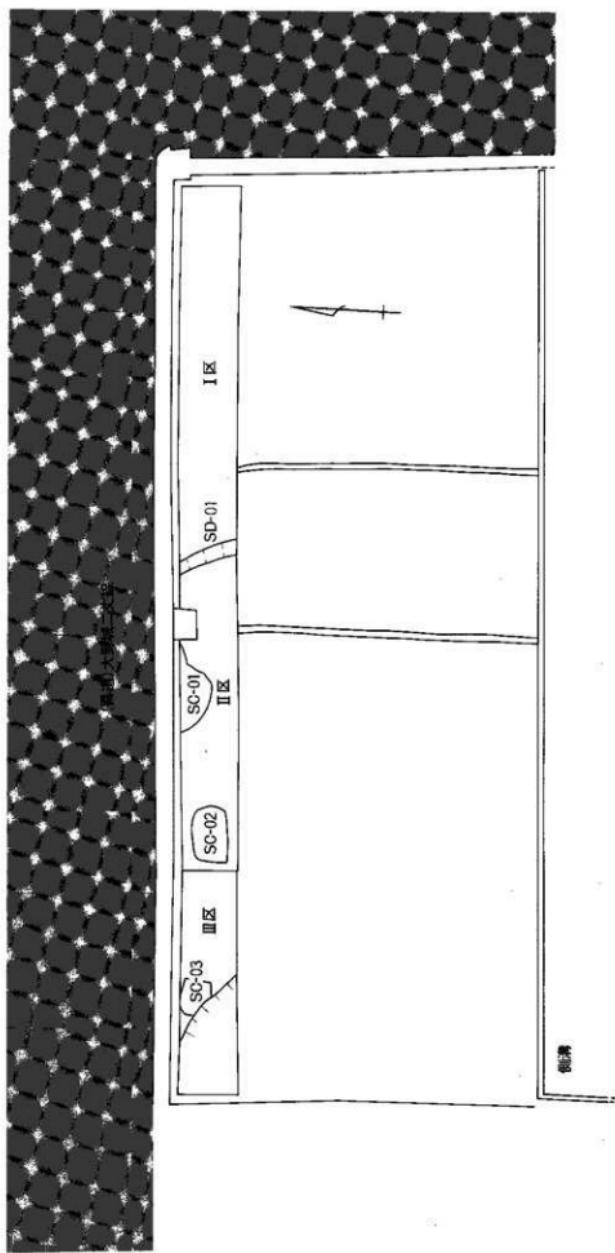


Fig. 1 第17次調査区の位置 (1/300)

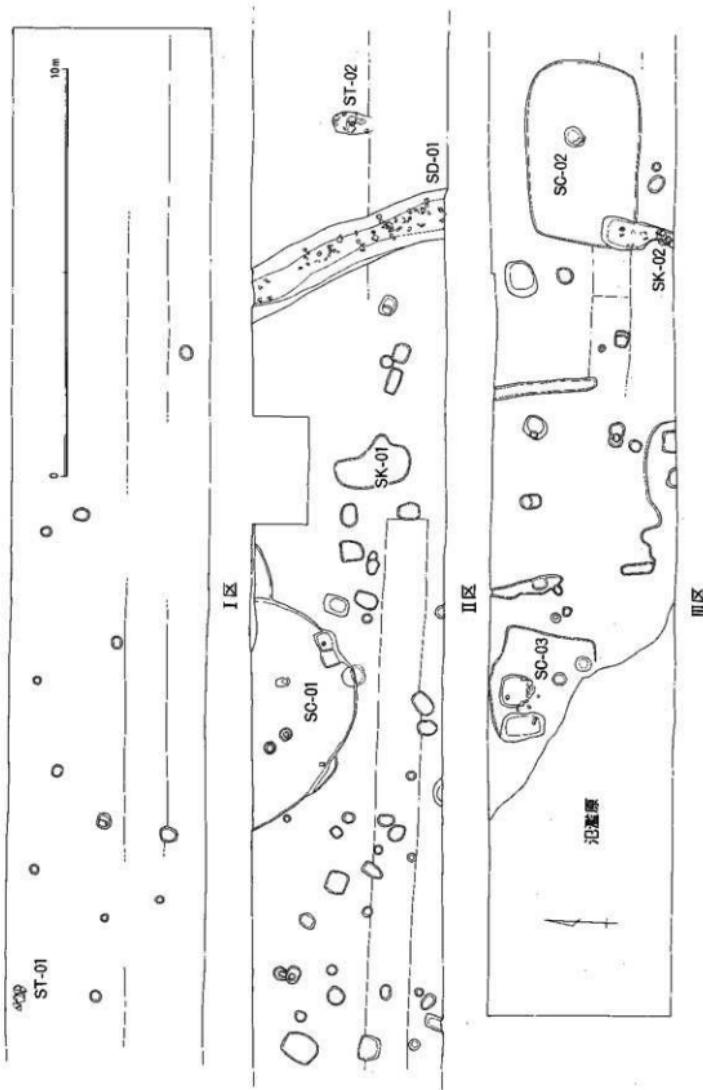


Fig. 2 第12次調査区遺跡記量図 (1/120)

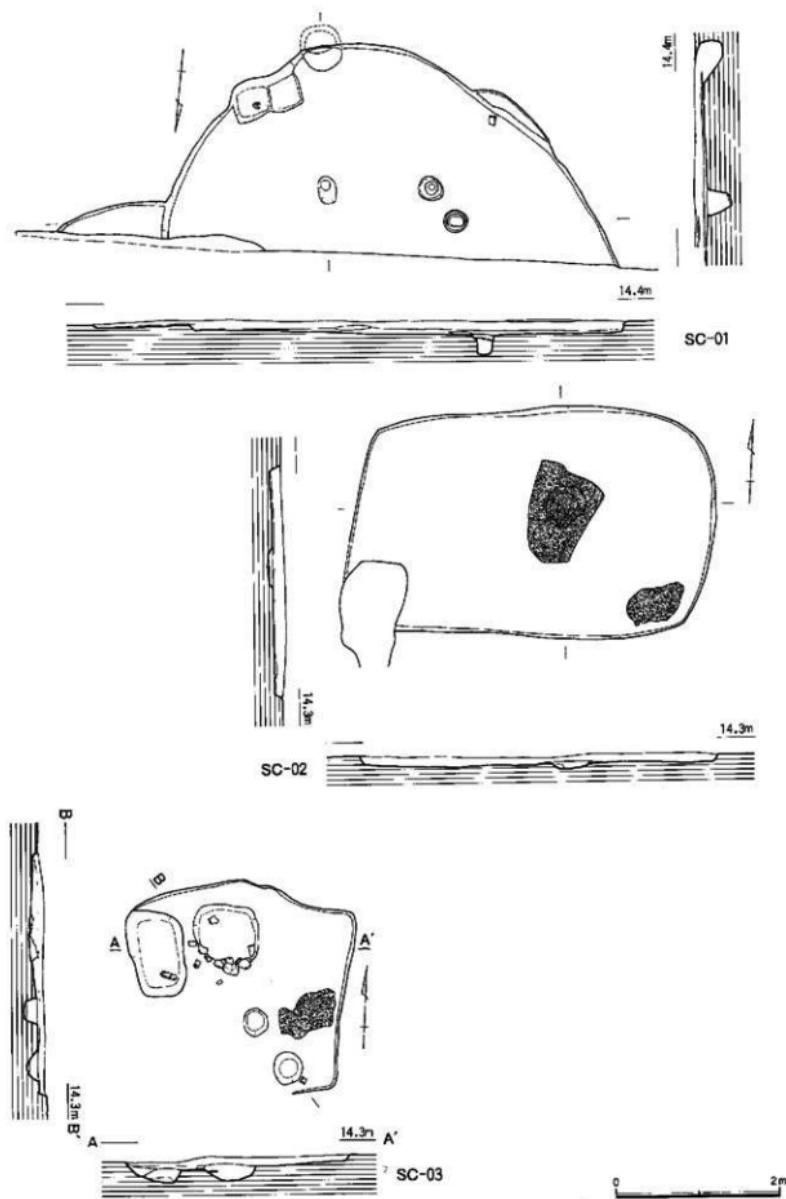


Fig. 3 SC-01·SC-02·SC-03 造構実測図 (1/60)

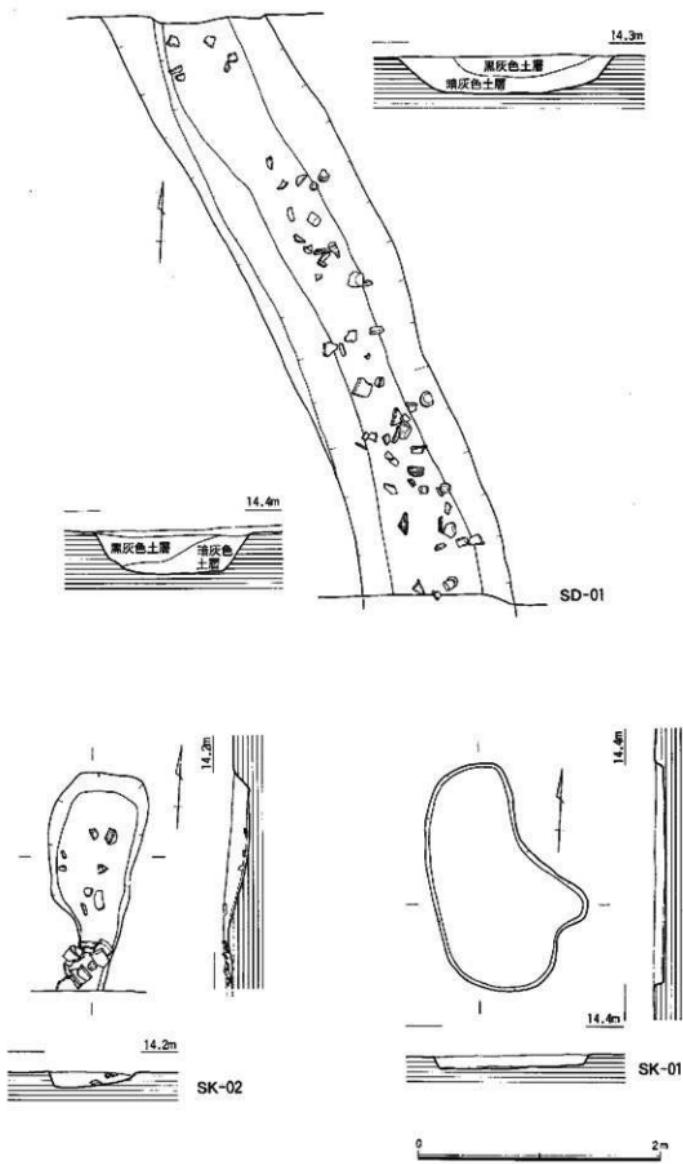


Fig. 4 SD-01・SK-01・SK-02 造構実測図 (1/40)

〔遺物〕

- 遺物は弥生土器と石器で、その量は、コンテナ5箱である。
- 001は、壺形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。頸部に2条の沈線を回らす。口径12.8cmをはかる。暗褐色を呈し、砂粒を多く含む。SK-01出土。弥生中期初頭に比定される。
- 002は、壺形土器の口縁部の破片である。口縁部の断面は逆L字状を呈し、頸部に断面二角形の突帯を回らす。口径25cmをはかる。茶灰色を呈し、胎土は砂粒を多く含む。外面に煤を付す。SX-02出土。
- 003は、壺形土器の口縁部の破片である。口縁部の断面は逆L字状を呈し、頸部に三角突帯を回らす。口径26.2cmをはかる。淡黄色褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含む。002と同型式である。SX-02出土。
- 004は、壺形土器の口縁部の破片である。口縁部の断面は逆L字状を呈し、頸部に三角突帯を回らす。口径25.9cmをはかる。淡黄褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含む。002・003と同型式である。SX-02出土。
- 005は、壺形土器の底部の破片である。外底部は上底で、径5.8cmをはかる。淡褐色を呈し、砂粒を多く含む。以上紹介した壺と同一個体の可能性がある。SX-02出土。
- 006は、壺形土器の胴部の破片である。黄灰色を呈し、外面は丁寧な横方向のナデを加えている。偏球形の胴部に断面三角形の突帯を回らす。最大径35.5cmをはかる。SX-02出土。
- 007は、太形蛤刃石斧の刃部の破片である。玄武岩製で、ほぼ中央部から折損する。刃部の最大幅7.8cmをはかる。SC-01出土。
- 008は、壺形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部は断面三角形を貼り付け、内側にもかかるくつまみあげている。口径23.4cmをはかる。淡褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含む。SC-03出土。
- 009は、磨製石斧の刃部の破片である。石材は不明で、ほぼ中央部から折損する。断面は球形に近い。
- 010は、磨石である。径4.5cm、厚さ3.0cmをはかる。斜方向の擦痕がみられる。石材は花崗岩である。
- 011は、石臼丁の未製品の破片と思われる。風化がすんでおり、表面は剥離している。
- 012は、石臼丁の破片で、穿孔の痕跡はみられない。風化がすんでおり、表面は剥離している。
- 013は、黑曜石製の石鎚である。基部に若干抉りがみられる。断面は横長の六角形を呈している。
- 014は、壺形土器の口縁部の破片である。復原口径33cmをはかる。黄灰色を呈し、粗砂粒を多く含む。脆弱である。
- 015は、丹塗の無頸壺の破片である。
- 016は、壺形土器の口縁部の破片である。口縁部の断面は逆L字状を呈し、口縁下に断面三角形の突帯を回らす。色調は黄灰色で、粗砂粒を多く含む。
- 017は、壺形土器の口縁部の破片である。口縁部の断面は逆L字状を呈す。色調は黄灰色で、粗砂粒を多く含む。
- 018は、丹塗の壺形土器の口縁部の破片である。口縁部の断面は逆L字状を呈し、内側につまり出す。口縁の端部に刻目をめぐらし、口縁下に断面三角形の突帯を回らす。色調は黄灰色で、粗砂粒を多く含む。
- 019は、壺形土器の口縁部の破片である。口縁部の断面は逆L字状を呈し、口縁下に断面三角形の突帯を回らす。色調は褐色で、粗砂粒を多く含む。
- 020は、壺形土器の底部の破片である。底径6.7cmをはかる。内外とも磨滅が著しく調整不良。
- 021は、壺形土器の底部の破片である。底径7.2cmをはかる。外底部に線の圧痕がみられる。

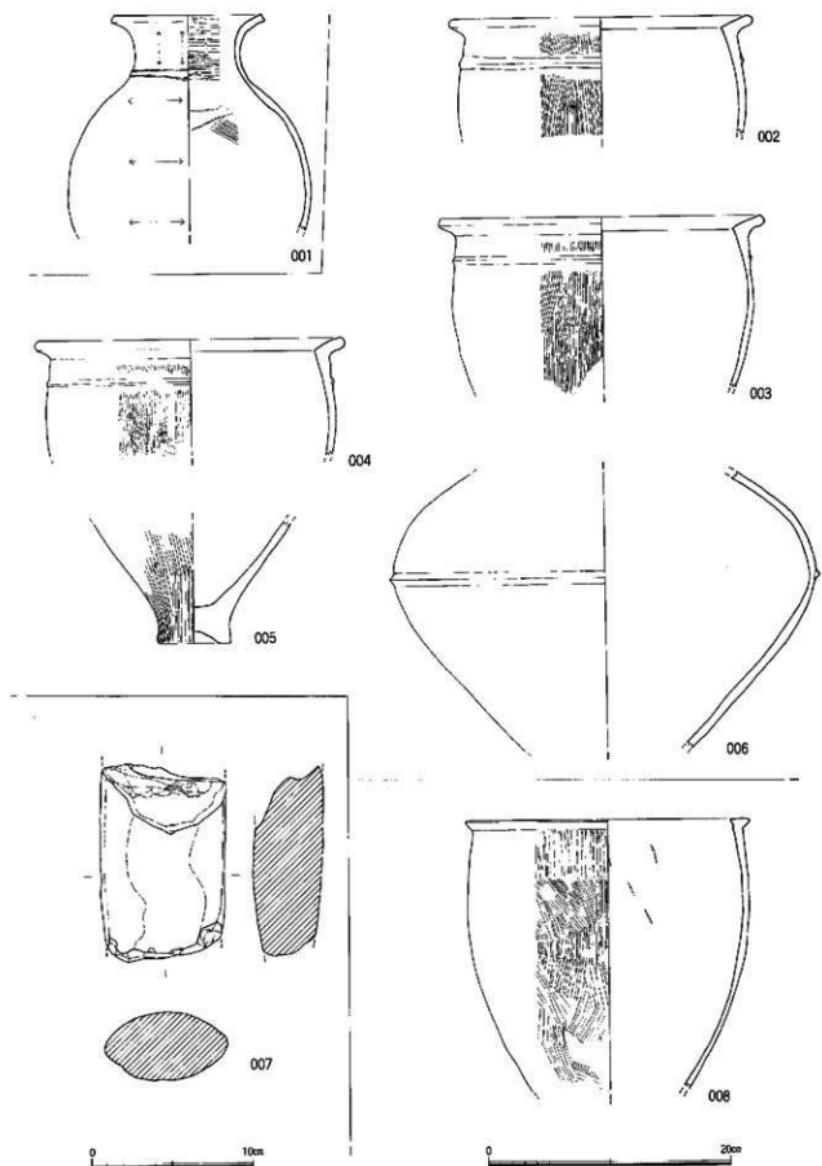


Fig. 5 SK-01・SK-02・SC-03 遺構実測図 (1/3・1/4)

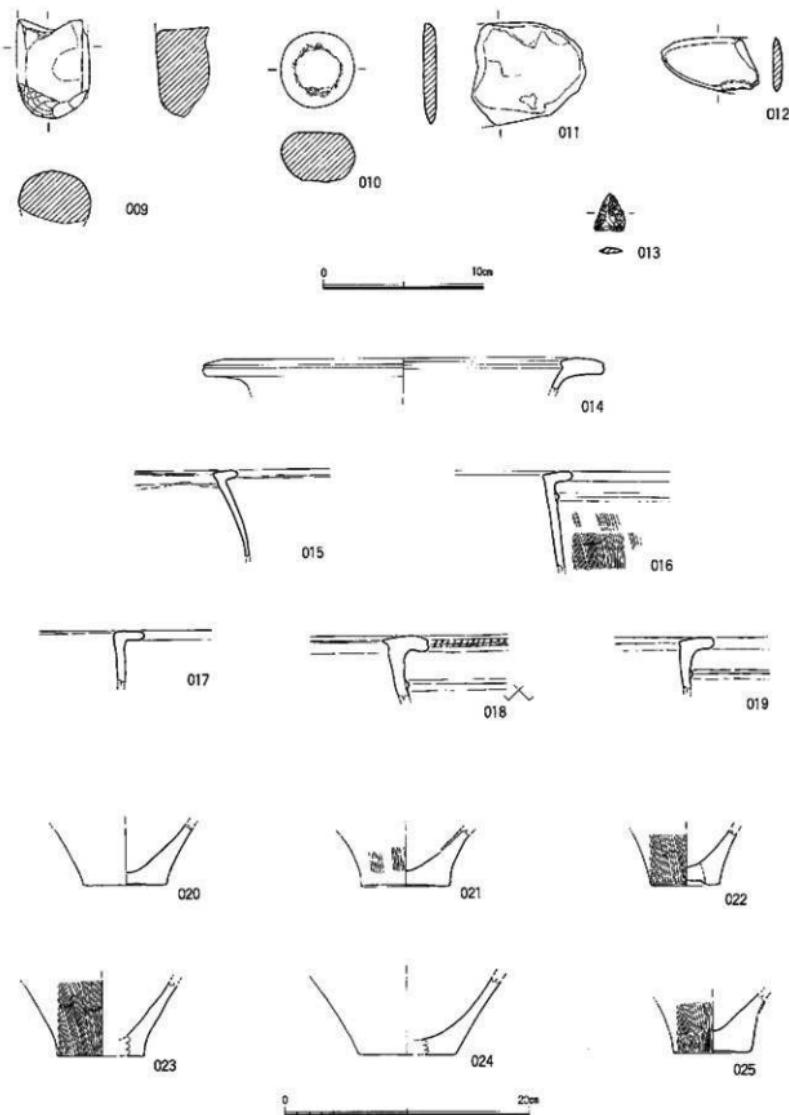


Fig. 6 SD-01 出土遺物実測図 (1/3-1/4)

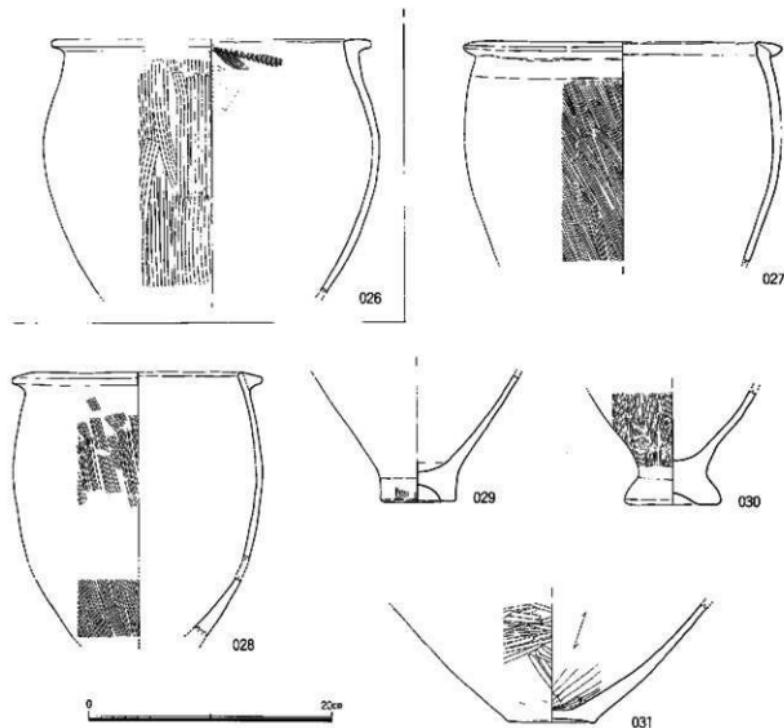


Fig. 7 ST-01-ST-02 出土遺物実測図 (1/4)

022は、壺形土器の底部の破片である。底径5.7cmをはかる。外底部は上げ底で、粘土を充填した様子が断面からうかがえる。

023は、壺形土器の底部の破片である。底径7.0cmをはかる。

024は、壺形土器の底部の破片である。底径8.0cmをはかる。内外とも磨滅が著しく調査不明。

025は、壺形土器の底部の破片である。底径6.3cmをはかる。

026は、壺形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部の断面は逆L字状を呈し、胴部中ほどに膨らみをもつ。口径26.3cmをはかる。黄褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含む。ST-01出土。

027は、壺形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部は外傾する擬口縁に断面三角形の粘土帯を貼り付けている。口径26.2cmをはかる。黄灰色を呈し、胎土は砂粒を多く含む。ST-02出土。

028は、壺形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部に断面三角形の粘土帯を貼り付け、胴部中ほどに膨らみをもつ。口径20.5cmをはかる。黄灰色を呈し、胎土は砂粒を多く含む。ST-02出土。

029は、壺形土器の底部の破片である。外底部は上げ底で、底径6.2cmをはかる。黄褐色を呈し、砂粒を多く含む。ST-02出土。

030は、壺形土器の底部の破片である。底径7.7cmをはかる。外底部は上げ底を呈し、いったんくびれて胴部へつながる。橙褐色を呈し、砂粒を多く含む。ST-02出土。

031は、壺形土器の底部の破片である。外底部は上げ底で、底径6.9cmをはかる。灰褐色を呈し、砂粒を多く含むが、内外とも丁寧に研磨されている。ST-02出土。

(3) 小 緒

今回の調査は小面積ではあったが、これまで確認されていなかった弥生時代の集落の分布が明らかとなった。まず中期前葉に、SC-02、SC-03の2基の住居跡そしてSK-01があり、SK-02やST-01、ST-02は、集落が引き続いて営まれたことを示している。円形プランのSC-01は中期中葉段階であろうか。最も新しい遺構は中期後葉のSD-01である。この溝が調査区外にどのように展開するのか今後の調査に注目したいところである。



(1) 第17次調査区全景（西から）



(2) 第17次調査区全景（東から）



(1)SC-01 発掘作業風景（西から）



(2)SC-01 全景（南から）



(1) SC-02 全景 (南から)



(2) SC-03 全景 (北から)



(1) SK-02 全景
(西から)



(2) ST-01 全景
(南から)



(3) ST-02 全景
(西から)





(1) SD-01 完掘状況
(東から)



(2) SD-01 完掘状況
(南から)



(3) SD-01 全景
(東から)

田村遺跡 12

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第524集

1997(平成9)年3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1
☎ (092)711-4667

印刷慶和印刷株式会社
福岡市博多区東郷町1丁目15-1
☎ (092)474-4881

THE TAMURA RUINS

12

Results of the 10th and 17 th excavations
of the Tamura ruins
in Fukuoka, Japan

Editor	Tadashi Takimoto
Contributers	Mikio Tsunematsu
	Tadashi Takimoto

March 1997
THE BOARD OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY